

空



2016 · 10 · 11

SORA 69号

須 惠 苑 実 耶

物の怪の取りつきしごと汗みどろ

生垣を右往左往の捕虫網

膝の傷また増やしたる夏休み

道問ふに人つ子一人居ぬ炎暑

老犬に苦瓜の影作りやる

北九州 横 田 敬 子

老人が忙しくなる夏休み

捕虫網玄関に立て祖母の家

葛の花むかしは蜚の住みし村

お迎へも送日も団子盃蘭盆会

規則とは破るものなり青胡桃

福 岡 栗 原 京 子

青田五枚渡りて鷺の白さかな

姫の面取らぬがよろし里神楽

占ひの台詞反復する夜店

古宮に女はをらぬ祭前

地下穿ち墓の広がる晩夏光

山 梨 野 畑 さ ゆ り

古き佳き写真や父のパナマ帽

夕闇に人集ひくる夏越かな

単線のカーブ大きく青田風

螢の夜母の季寄せを繕へり

天の川遺影の部屋を開け放つ

兵庫 森 俊 人

老鶯や瀬渡り石を人ひとり

航跡に航跡重ぬ蟬しぐれ

川風に向かふあきつの群れてをり

野の川の流れ八月十五日

雲はいまかたち変へをり秋遍路

北海道 押 田 裕 見 子

泣きもせず母を待つ子へソーダ水

旧姓を思ひ出したる郷の盆

真似事の盆の経あぐわらしやんど

見得と欲捨つれば安し含羞草

障りなき話に開く秋扇

福岡 吉 村 摂 護

毒クラグ腿の深さで人を待つ

惜しみなく千枚田へと晩夏光

死に絶えし如く空港霧の中

ビル街に炎暑の壁の厚さかな

揚羽群れカラユキさんの港かな

東京 古 川 夏 子

みちのくの相撲巡業稲びかり

相模野の残る暑さや風神祭

うま酒を抱きて走る白雨かな

駅近く住みて目黒のさんまかな

洛北や丹波焼栗いかがどす

兵庫 岩井京子

東京 遠山のり子

成木責せし甲斐ありて青柚成る
金平糖のやうな角持つ青柚子も
成木責せぬ檸檬までたわわなる
片方の軍手に詰めるプチトマト
あだ花の無きをつくづく茄子実る

古墳めく寺の庭石秋茜
木のもとに雀しきりや秋暑し
初嵐雀闘ふ構へなり
秋遍路草のもつれに躓けり
花野行くときどき花に触れながら

兵庫 青木朋子

阿修羅像の中の少年夏初め
鳴神や伐折羅大将朱き口
青時雨戒壇院に天邪鬼
涼しさよ日光月光菩薩の辺
香煙の二月堂より大夕焼



空作品抄
—
柴田佐知子抽出

盆路に兄弟の影重なり

豆腐切る薄きてのひら稲光り

水茄子を切り夕暮に年をとる

山彦は山にとどまり青芒



高倉和子

原友子

岸洋子

戸栗末廣



かなかなや男所帯の皿の音

結界のやうな吊橋雲の峰永淵恵子

動くたび目高の目玉こぼれさう

滴りに引つ張られては滴れり

秋すだれ裏と表になりにつけり

炎天の赤信号や死者渡る

秋の風鈴呼ばれしやうに鳴りにけり

エアメールは鷗の白さ涼新た

墓井戸のけもの鳴きして木の実降る

目玉まで塩を振らるる秋刀魚かな

決断のあとは迷はず烏瓜

ふる里の灯りは暗しちちろ虫

桔梗の蕾の角に狂ひなし

宮井知英

永淵恵子

松田明子

角野良生

森田明成

曾根富久恵

中田みなみ

深川淑枝

千波悠

小林朱夏

吉田葎

石橋幾代

山本則男

着替へをり簾一枚侍みとし

山内 碧

草刈りし匂ひのこもる深廟

西住三恵子

半畳に納まる母の昼寝かな

林 徹也

地獄絵の前の読経や秋涼し

田中とし江

掃き終へて風にさらせる汗の顔

苑 実耶

近所とて座敷初めて初盆会

河原敬子

空腹で死にさうに見ゆ捨案山子

仲里奈央

叱られて目高叱つてゐる子かな

天谷翔子

秋蟬やをりをり遠目して話す

井上和子

はんざきの川をそのまま村亡ぶ

えとう樹里

雪溪に立てば大きな空のあり

白水良子

貝がらを拾ひ髪膚の夏めきぬ

田坂能雄

悪妻になりたき朝も目刺焼く

吉田悦子



其処ここに釣瓶落しの灯の点る

往還に命知らずのいぼむしり

鳳凰となりて一面うるこ雲

秋風に添ひて八十路となりにけり

螺旋階段のぼるごとくに立葵

ふるさとへ子らは帰らず鰯雲

立秋や蛇口に眼鏡丸洗ひ

退りゆく影の膨らむ薪能

それぞれに好みの場所や三尺寝

土用東風塩吹いてゐる梅の甕

哲学の道にころがる木の実かな

山牛蒡隣町から来たあの子

灯台の明りの届く夏料理

田代民子

三井所美智子

田邊豊子

吉村摂護

織田高暢

横田敬子

田岡千章

あさなが捷

小島翠波

窪みち子

柴田志津子

後藤園子

秋 千晴

もてなすや山の影置く青田もて

青柿や乳飲む嬰は目をつむり

朝涼や搾乳缶の満つる音

新品のシャツ連なりぬ山開き

子犬にも駄菓子与ふる地藏盆

草の市流さるる物買ひにけり

女人みな笑みて無花果食む厨

山車を組む木槌の音や汐の桶

菊の酒眺むるのみとなりし夫

晩学の道遥かなり雲の峰

太刀魚の光の棒を釣りあぐる

潮の香の風に波打つ大花野

長き夜や樋をあふるる雨の音

野畑さゆり

今井春生

森 俊 人

荻 悠 子

大西のり子

山田正子

青木朋子

桐 山 甫

立花 一 枝

日 高 孝

田口萬智子

押田裕見子

田中素直



初秋や杭を打ち込む分譲地

博物館の外は浮世や秋のセル

舳先にて髪解き放つ夜の秋

秋澄むや昔電話は玄関に

秋灯まづ鉛筆を削りたる

眼が合ひて赤子の笑ふクローバー

秋の日や庭師何かと剪りたがる

登り来て市街一望昼の虫

コーランの流るる町や星月夜

峡に橋かくるごと鳥渡りけり

山肌を火の粉のめぐる大文字

歩くことただただ楽しすみれ草

青空をたつぷり使ひ棕鳥渡る

清水量子

樋口みのぶ

古川夏子

田代貞香

岩井京子

本多トミ

村上二三

遠山のり子

わたなべ漣

三輪敏夫

村上典子

浅野佐代子

森 真二

空作品評

柴田佐知子

かなかなや男所帯の皿の音

宮井 知英

盆路に兄弟の影重なれり

高倉 和子

帰ってくる祖霊のため草を刈り掃除をして整えた盆道。〈兄弟の影重なれり〉…ここには父や母の存在が感じられない。彼の世から家へと帰ってくる霊を迎える兄弟、その重なる影のみに焦点を定めたことで現れてくる空間にしみじみとした情感が満ちてくる。

豆腐切る薄きてのひら稲光り

原 友子

私も味噌汁の豆腐などは俎板を使わずてのひらに乗せて切る。庖丁の刃を豆腐に沈めるようにふわりと真っ直ぐに落して切っていく。ただそのことを詠んでいるだけなのだが〈薄きてのひら〉の〈薄き〉そして配された〈稲光り〉の選択が効いている。引けばすつとてのひらを切る庖丁の刃なのだ。急に怖くなる。

〈男所帯の皿の音〉によって、いきなり男所帯に放り込まれたような実感が湧きあがる。〈皿の音〉という何の銜いもない突き放した詠み方がいい。男所帯と、女性の手がある家の違いを〈音〉だけで見事に捉えている。

結界のやうな吊橋雲の峰

永淵 恵子

吊橋を見上げるやうな位置に立つておられるのだろう。〈結界のやうな吊橋〉によって、立ち入ることを許さぬやうに眩しく立ちあがる〈雲の峰〉が見えてくる。

滴りに引つ張られては滴れり

角野 良生

〈滴り〉は崖や岩から滲み出てくるもの。同じ夏の季語「泉」や「清水」とは違い水量が乏しく、葉陰などでひっそりと滴っている。

水が膨らんできてこらえきれないように離れてゆく。次の一滴が〈引つ張られては〉それに続く。上五

と下五の〈滴り〉を除くとこの句には〈引つ張られては〉しか残っていないのだが、見事に滴りの本質に追っている。クローズアップされた映像鮮やかな作品。句のうしろには、滴りを見極めようと凝視する作者が立ち上がってくる。

秋すだれ裏と表になりにけり

森田 明成

〈裏と表になりにけり〉ということとは、はじめは裏と表がなかったということだ。夏の陽ざしを遮るため掛けたのは、青竹を用いたすがすがしい青簾だったのかもしれない。陽ざしを受けた面はより色が褪せたのだ。秋簾を詠んでいながら、ひと夏の強い陽ざしが詠みこまれている。〈裏と表になりにけり〉：読み手を信じた思い切りの良い表現である。

近所とて座敷初めて初盆会

河原 敬子

こう言われてみて確かにそうだ。近所の方と道や玄関先などではよく話をするが、座敷まで上がり込むことは少ない。私も初盆を迎えられたお宅に参り座敷に上がったとき、初めてだったとちよつとした驚きがあった。しかし、その驚きを詠むことはなかった、敬

子さんの句を読み、身辺を丁寧に詠まねばとあらためて思った。

はんざぎの川をそのまま村じぶ えとう樹里

〈はんざぎ〉は夏の季語「大山椒魚」の別称。半分に裂いても命を保つという俗説からこの名があるという。

過疎化が進み、ついにこの土地より人が去ってしまったのである。人が消えてしまった山河に更には静かな時間が流れる。〈生きた化石〉と言われる〈はんざぎ〉は山あいの清流で悠々と命をつないでゆく。その他とりあげたかった句をあげる。

水茄子を切り夕暮に年をとる	岸 洋子
山彦は山にとどまり青芒	戸栗 末廣
炎天の赤信号や死者渡る	曾根富久恵
地獄絵の前の読経や秋涼し	田中とし江
貝がらを拾ひ髪膚の夏めきぬ	田坂 能雄
悪妻になりたき朝も目刺焼く	吉田 悦子
朝涼や搾乳缶の満つる音	森 俊人

空集

柴田佐知子選



十葉を干して病魔を寄せつけず
千葉 原 友子

揚はなび支離滅裂の美しく

噴水にぶつかる雨の挫折かな

峰雲や漁網繕ふ顔上げず

豆腐切る薄きてのひら稲光り

流木に母国はひとつ夏の月

子子の水を投げ捨て寺男

水茄子を切り夕暮に年をとる
福岡 岸 洋子

真つ白なタオルを首に盆用意

送り盆夜のぶらんこ少し漕ぐ

形くづれず蚊遣り香の灰の渦

溢れ蚊や畳つめたき父母の家

亡き夫を恋はず想へり籠枕

茄子植うる赤子を寝つかするやうに
兵庫 戸栗末廣

杉の苗しつかり根付き祭来る

山彦は山にとどまり青芒

おふくろの声に躑ぎゆく羽抜鳥

着飾りて祭の馬の大きくなる

盆路に兄弟の影重なれり

妖しげな口上うねる放生会

虫の夜いよよ一人と思ひけり

抱卵の愉快のごとき秋日和

柘榴の実恋に溺れしごと裂けて

豊作の鳥ごと熟るる匂ひかな